

式 辞 （令和6年度厚真町戦没者追悼式）

本日ここに、戦没者のご遺族並びにご来賓の皆様のご参列をいただき、厚真町戦没者追悼式を執り行うにあたり、戦禍の犠牲となられました御霊（みたま）に対し、厚真町民を代表して謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦が終わりを告げてから、七十九回目の夏を迎えました。祖国の平和と発展を願い、また家族の安泰を念じ、苛烈を極めた戦場に倒れた方々、あるいは戦後、異郷の地に残され、飢えや病に倒れ、祖国に帰ることが叶わなかった方々に思いをはせるとき、尽きることのない悲しみが胸にこみあげてまいります。

一方で家族の柱や担い手を失われ、筆舌に尽くしがたい悲しみに耐えられ、立派にご子弟を養育されながら地域社会の安定、発展に貢献されてこられましたご遺族の皆様のご努力に対して、ここに改めて深甚なる敬意を表します。

現在の日本の平和と繁栄は、戦没者の方々の尊い犠牲の上に築かれていることを、改めて私たちは正しく認識し、その使命と次世代に対する重い責任を自覚する必要があります。

近代日本が辿った紛争解決のための武力行使を深く反省し、教訓として戦争を放棄した我が国ではありますが、戦争を直接知らない世代が多数を占めるようになった今、改めて過去の歴史に謙虚に向きあい、戦争の悲惨さと、核の功罪を明らかにし、決して人類の未来が閉ざされることのないよう、平和の尊さ、平和を堅持する智慧を次の世代に

しっかりと継承していく必要があります。

戦争の惨禍を、二度と繰り返さない。我が国の恒久平和への誓いは、昭和、平成そして、令和の時代においても決して変わることはありませんが、世界に目を転じれば、テロや地域紛争のみならず、戦争状態が更にエスカレートしている地域もあり、多くの方々が傷つき苦しみの中にあります。報復の連鎖を食い止めるのは生易しいものではありませんが、出来うる限り民族や宗教、主義や思想の違いを乗り越え、分断から寛容の時代へと国家間の相互理解を進めていかなければなりません。

大戦の当事国であり唯一の被爆国である日本は、国際平和にさらに積極的に貢献していく必要がありますが、核廃絶という被爆者の願いも大国の思惑の前では顧みられない場面が多々ありました。しかしながら、私達は決して怯むことなく、そして諦めることなく世界市民の理解の広がりや民間交流の深化とともに、私たち一人ひとりの平和を希求する努力を継続していかなければなりません。

北海道胆振東部地震の発災からまもなく6年を迎えます。私達は誰よりも命の大切さを知っています。平和と民主主義のもとで、国民の命と暮らしが守られ、次の世代を担う子供たちが、ふるさとの明るい未来を切り拓いていけるそんな社会を町民一丸となつてこれからも守り通してまいります。

終わりに、戦没者の御霊(みたま)の安らかならんことを、そして、ご遺族の皆様のご多幸をお祈り申し上げまして、式辞といたします。

令和六年八月二十三日

厚真町長 宮 坂 尚市朗